

干拓から始まる 岡山平野南部地域の成り立ち

歴史文化

暮らし

環境



「岡山平野鳥瞰記 より」



「児島湾周辺農業水利事業 完工記念誌 より」



「児島湾周辺農業水利事業 完工記念誌 より」

農林水産省 中国四国農政局
岡山南土地改良建設事業所

干拓の歴史

岡山平野の南部一帯は、秀吉の高松城水攻めがあった天正10年（1582年）当時、瀬戸内海に浮かぶ児島（現在の児島半島）と本土との間に20余りの島々を点在させた美しい海でした。この地域は「吉備の穴海」と呼ばれ、東に吉井川、西に高梁川、中央部に旭川と岡山県の三大河川が全てこの海に流入していました。従って三大河川の強力な沖積作用で島々の間には干潟が発達し、近世干拓史のスタートを可能にする条件に恵まれていました。

1585年の宇喜多開墾に次いで行われた西阿知新田・東阿知新田の開発により、高梁川（東高梁川）左岸堤防が児島の西北端に達し、この時点（1618年）をもって児島半島が誕生しました。「吉備の穴海」は半島に抱かれた静かな入海「児島湾」に変貌しましたが、二大河川（旭川・吉井川）の沖積作用により干拓の適地として新田開発が盛んでした。江戸時代の寛永年間より慶応に至る約240年間をみると、児島湾沿岸で約6,800haもの土地が干拓により造成されています。

明治時代になると廃藩置県に伴い、家禄を奉還した旧士族たちの授産事業としての干拓による農地造成が契機となり、大阪の豪商「藤田伝三郎」によりこの地域での大規模干拓が開始されました。

湾内約7,000haのうち、約5,500haを8工区に分けて順次着工し、昭和16年までに第1～第5工区約2,970haが造成されました。昭和14年に着工した第6区（約920ha）はその後の農地改革制度に伴う藤田農場解体により一時工事を中断していましたが、昭和23年農林省がこれを引き継ぎ、昭和29年に完成しました。また第7区（約1,650ha）は昭和19年農地開発営団によって着工しましたが、昭和22年営団閉鎖に伴い農林省に引き継がれ、昭和38年に完成して現在に至っています。



藤田伝三郎（1841-1912）

山口県萩市出身。高杉晋作の騎兵隊員でした。明治維新後、藤田組を組織し、数多くの事業を行いました。岡山市南区藤田という地名は、児島湾干拓で偉業をなした藤田伝三郎の「藤田」が地名となったものです。

「児島湖 過去から未来へ 岡山海岸保全事業のあゆみ より」

干拓の歩み——年表

古 代	吉備の穴海の時代 現在の岡山・倉敷の市街地の大部分は海面下。20余の島が浮かぶ吉備の穴海と呼ばれていた。吉井・旭・高梁川の沖積作用で次第に遠浅の海になり、これが後の干拓のベースになる。	
	●奈良時代 8～9世紀 十二ヶ郷用水湛井堰造られる。 吉備の穴海で小規模な干拓が始まる。 中国山地で、タタラ製鉄が盛んになり、岡山の三大河川で大量の土砂が流出。吉備の穴海の堆積が進む。	
	●平安時代 1182年 妹尾兼康は湛井十二ヶ郷用水大改築。 1184年 源平の藤戸合戦当時、児島は本土と離れた島だった。浅瀬の海峡は藤戸の渡しがあった。	
中 世	●室町時代 1492年頃 ハケ郷用水疎通する。	
	大規模干拓の開始 秀吉の高松城水攻めの堤防造りの技術ヒントに宇喜多秀家、干拓を始める。	
近 世	●安土桃山時代 1582年 羽柴秀吉、備中高松城水攻め。12日間で約3キロの堤防を築く。 1585年 宇喜多秀家、酒津・倉敷間に宇喜多土手を築き干拓備前・備中の干潟地開発の始まり。	
	藩営大干拓の時代 ●江戸時代 寛永年間から慶応に至る240年間に約7,000haもの大干拓が行われた。	
	1630年頃 児島は本土と陸続きとなる。 吉備の穴海は東の児島湾と西の阿知洞にわかれる。 寛永年間、戸川正安、福田古新田、大福新田開発。 加須山新田、船穂内新田、吉岡新田、旭川・笹ヶ瀬川間の大半が開発される。	
	1688～1703年 元禄年間、備前藩営の大干拓が始まる。 倉田新田 (1679年 329ha) 幸島新田 (1684年 591ha) 津田永忠、沖新田 (1696年 1539ha) 備中藩でも、藩営干拓を中心に大規模干拓が進む。 浅口郡 (2454ha) 窪屋郡 (1649ha)	
	1670年頃 津田永忠、百間川開削。 自動開閉式観音開き唐樋の水門や遊水池を設ける。	
	1679年 津田永忠、倉安川開削。舟運、干拓地用水路として活用。	
	1686年 津田永忠、坂根堰より取水する大用水建設。	
	1700年代初め 児島郡で民営大規模干拓が始まる。 茶屋町付近 (400ha) 享保元年、福田古新田 (100ha)、二人の人柱の犠牲あり。	
	備前沖新田開発後120年間、干拓事業は停滞する。 1754年 干拓と漁業をめぐる備前・備中両藩の国境論争起きる。	
	文政年間 十二ヶ郷用水より興除新田の用水確保。 十二ヶ郷用水東手用水路より分水し、汗入川を掘削、汗入（あせり）水道を設ける。汗入峠の岩質が固く岩石を焼いて割り取る。	
世	1824年 興除新田840ha造成。	
	1845年 福田新田開発。	

民営大干拓の時代

明治維新後、民間の干拓気運は高まり、藤田伝三郎の「藤田干拓」は、現代の児島湾干拓の基礎となる。

●明治時代

1873年 (明治6)	禄を失った士族144名が児島湾の開墾を出願するが成功せず。
1880年	生本伝九郎、児島湾全域干拓構想を高崎知事が内務卿に具申。
1881年	オランダ土木技師ムルドルが児島湾実地調査。 全面干拓を否定。河口を広げて堰堤を造る方法を提言。
1882年	生本伝九郎、大阪の豪商藤田伝三郎に干拓事業への参加を要請。
1889年	藤田組の干拓起業（ムルドル技師指導による計画）認可される。
1899年 (明治32)	児島湾干拓第一・二区の工事着手。
1900年	第一区潮止完了。 高崎知事にちなむ「高崎」の地名が残る。
1904年	第二区潮止完了。
1905年 (明治38)	第一区の干拓地完成。 1914年（大正3）耕地整理ができる。
1912年 (明治45)	第二区の干拓地完成。藤田村誕生。 藤田伝三郎死去。

●大正時代

1914年 (大正3)	児島湾干拓第三・五・六区の工事着手。 第一区の耕地整理完了。
1917年	興除村にアメリカ製エンジン輸入される。
1920年	外国製耕耘機輸入され藤田農場で使用。
1922年	興除村、福田村等で小作争議起こる。
1924年	未曾有の大干ばつで発動機、ポンプが普及、脱穀機、粃搗機等普及し農業の機械化が進む。

●昭和時代

1933年	児島湾干拓第三・五区の本工事着手。 児島湾沿岸各漁協は開墾許可取消しの行政起訴。
1935年	第三・五区の潮止完了。
1937年	第三・五区西部地区の分譲開始。
1939年	第六区の本工事着手。 この年85日間干天の大干ばつで干拓地ではほとんど収穫皆無。
1940年	第三・五区東部地区の区分竣工。 引き続いて41、49、50にも竣工、東部は工業地帯に、西部は農業地帯になる。
1941年	第六区の潮止完了。
1944年	第七区の工事を藤田組より農地開発営団が引き継ぐ。

農林省干拓の時代

戦後、藤田組の干拓事業は農林省が引き継ぎ、大規模干拓が進む。

1945年	藤田組は商号を同和鉱業(株)に変更。
1946年	農地改革により第六区は国家買収、農林省が引き続き施工。
1947年	第七区工事を農地開発営団より農林省が引き継ぐ。
1948年	第七区の潮止完了。 農林省は藤田組より第六区の埋め立て免許を買収。 第七区への入植始まる。
1951年	第六区干拓事業竣工。

児島湖淡水化始まる

1956年	児島湖締切完了。 昭和天皇・皇后陛下が締切堤防をご視察。
1959年	締切堤防完工記念切手を発行。
1961年	締切堤防開通式。
1963年	第七区完工。
1963年 (昭和38)	児島湾干拓が完成、現在の地勢となる。

「児島湾締切堤防の概要 より」

コラム 干拓の方法

干拓は海の中に堤防をつくり、堤防で囲った中の水を海に出すことで陸地に変えていきます。



①海の中に堤防をつくります。 ②海の満ち引きを利用したり、ポンプで排水し、陸地にします。



埋立との違い

埋立は、海の中に土砂を入れて新しく土地をつくる方法です。埋立は、海より土地が高くなるようにつくります。



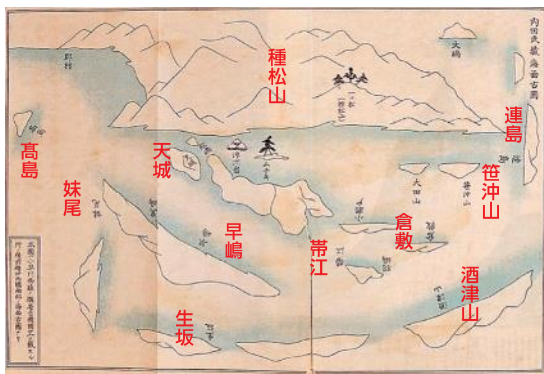
古代の児島湾

秀吉の備中高松城水攻めがあった天正10年（1582年）当時、瀬戸内海に浮かぶ児島（現在の児島半島）と本土との間には、20余りの島々が点在する美しい海で「吉備の穴海」と呼ばれる浅い海が広がっていました。

東の吉井川、西の高梁川、中央部に旭川と岡山県の三大河川が全てこの海に流入し、上流部の中国山地において、たたら製鉄のための砂鉄採取や、製鉄に不可欠な木炭を得るための伐採が長く続けられていたことから、土砂が大量に流れ込み、その強力な沖積作用で干潟が発達していました。

近世の干拓

干拓するには好条件であったこの地は、古代から細々と干拓が続けられていましたが、戦国時代の宇喜多家、江戸初期の備中松山藩の干拓により、高梁川左岸が児島と陸続きとなり、児島湾が誕生しました。



【戦国時代の海面古図】

かつては多くの島々が浮かぶ海でした。みなさんにもなじみのある地名を見ることができます

「岡山平野鳥瞰記 より」

【現在の地図】

海の大部分は陸地になり、現在の岡山平野になっています

※ 地理院地図を加工して作成



注) 海面古図と比較しやすいよう、現在の地図を逆さまにしています。

明治時代から昭和にかけての干拓

「児島湾干拓と児島湾締切堤防」より抜粋

明治時代に入ると、これまでお殿様に仕えていた武士の人たちが仕事を失なったため、こうした人たちが農業で生活できるように児島湾の干拓が行われました。

政府はオランダ人のムルデルに児島湾を干拓できるかどうか調査を依頼し、ムルデルは児島湾を8つの区に分けた干拓の計画をとりまとめました。

しかし、実際に工事するには、多くのお金が必要となり、なかなか工事が開始されませんでした。

そうした中、大阪の大富豪「藤田伝三郎」に工事をお願いし、伝三郎は自分のお金を出して工事を開始しました。

当時は、コンクリートも無い時代で、大きな石や木の枝などを使って堤防の土台をつくり、その上に土や石を積み上げ堤防を築いていきました。しかし、児島湾は底なしのような海で、堤防ができあがるとその重みで海の中に沈んでしまう大変難しい工事でした。

その後、昭和23年に国（農林省）が工事を引きつぎ、昭和38年にすべての干拓事業が完成し、約5,500haの農地ができあがりました。

工事が完成したばかりの干拓地は、土の中に塩が混ざっていて、お米を作るのに大変苦勞をしました。塩分を抜くために田んぼの中に溝を掘ったり、用水路をつくったりして、農業ができる環境を整えていきました。

また、飲み水や生活に使う水は、井戸を掘っても塩水がでるため、溜めた雨水をろ過して使ったり、干拓地の外の村まで水をもらいに行っていました。今、児島湖の周りに広がる田んぼや畑は、昔の人たちの苦勞や努力によってできた土地なのです。



ムルデル (1848-1901)

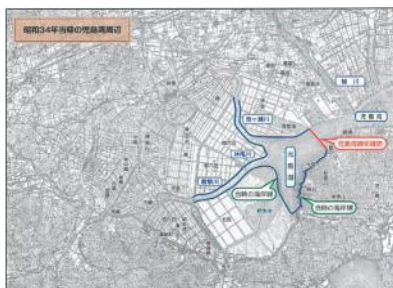
オランダ生れの土木技師。明治12年に来日しました。明治23年(1890)に完成したわが国土木史上、屈指の大事業となった利根運河を手がけました。



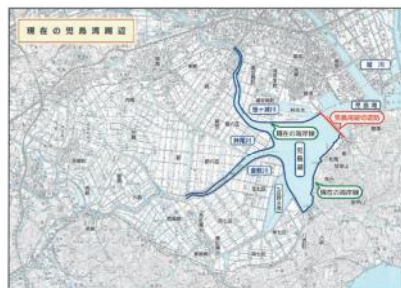
明治30年代ごろの児島湾周辺図



大正14年ごろの児島湾周辺図

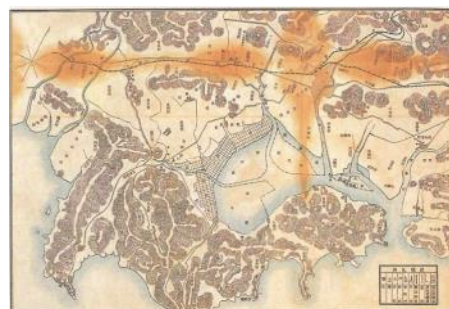


昭和34年当時の児島湾周辺図



現在の児島湾周辺図

「児島湾干拓と児島湾締切堤防～昔と今～より」



ムルデルが策定した児島湾干拓計画図
(農林水産省HP：近代の児島湾干拓計画を策定したムルデル より)

【干拓に関わる遺産と 関連施設マップ】



①第一号干拓堤防



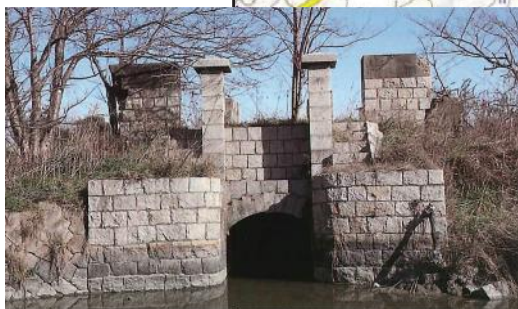
②第二号干拓堤防



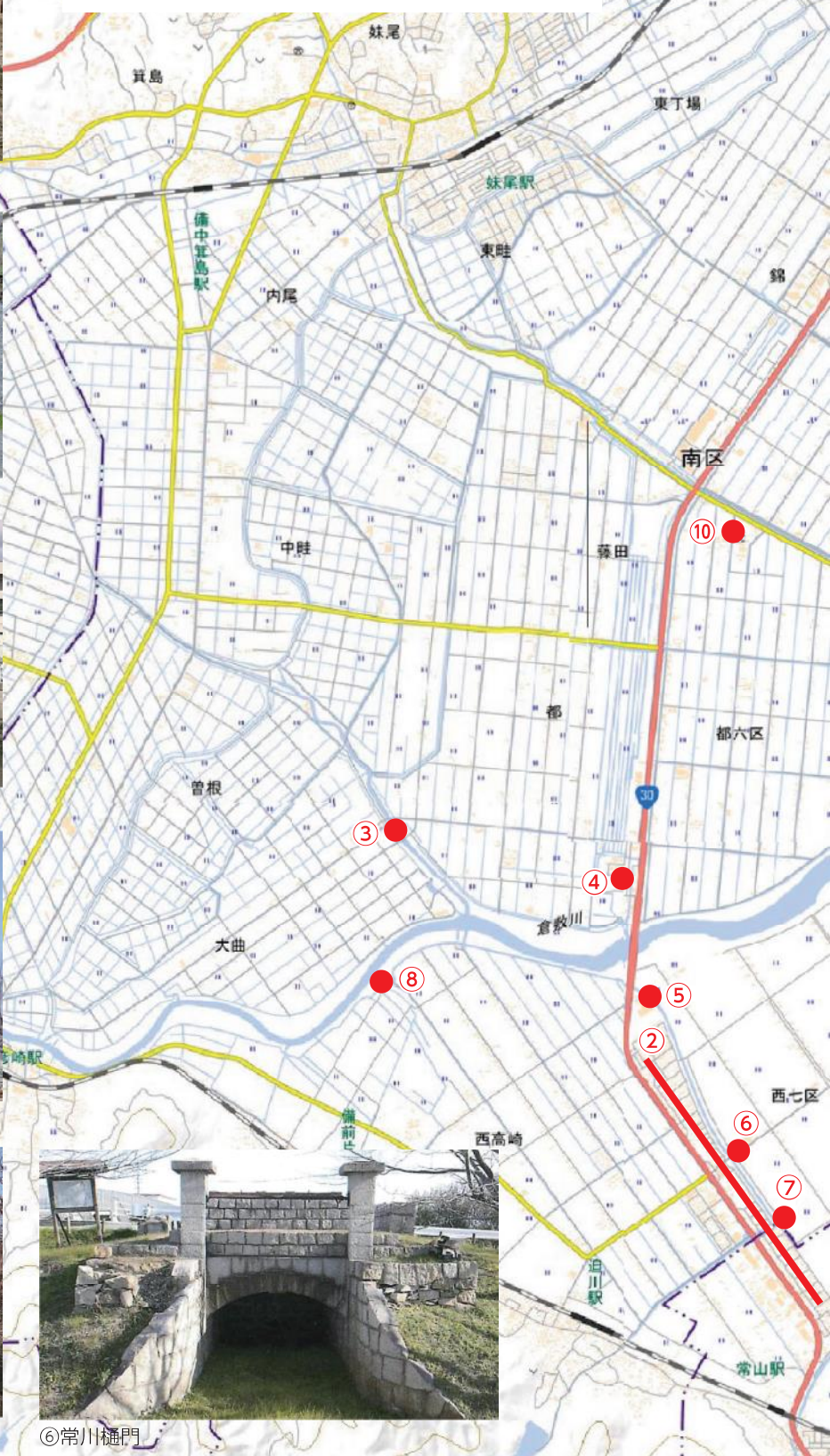
③丙川三連樋門



④桜の馬場樋門



⑤片崎樋門



⑥常川樋門



⑦宮川樋門



⑧奉還樋門



⑨児島湾干拓資料室



⑩岡山県立興陽高等学校

※ 地理院地図を加工して作成

干拓に関わる遺産と関連施設の紹介

①第一号・②第二号干拓堤防

初めに着工された第一区では、明治32年から翌年末に潮止め工事が完了しました。その工事で築かれたのが第一号と第二号堤防です。軟らかい地盤の上に堤を築くことは困難を極め、藤田組の技術者が工夫を重ねてようやく成功したものです。



第一号干拓堤防
「近代化遺産ガイドブック より」

第一号堤防のある加茂崎地区（玉野市）は、前面の海が干拓されておらず、完成当初の堤防がそのまま残っている貴重な場所でしたが、平成18年頃に改修されました。

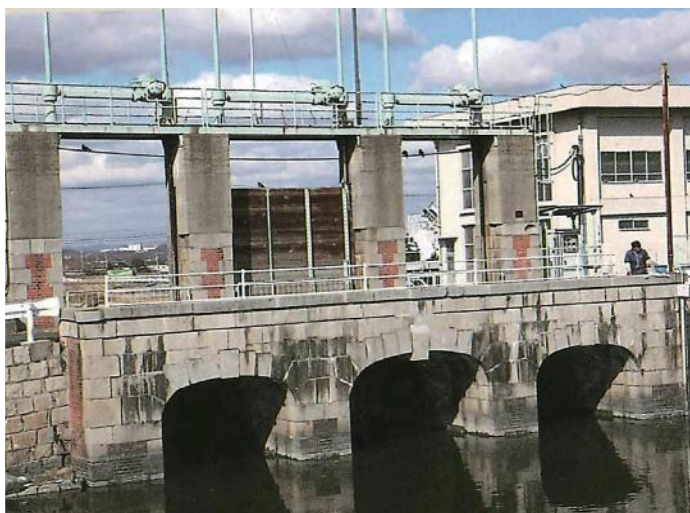
第二号堤防のある高崎地区（岡山市・玉野市）は、前面の海が後に干拓されたため陸地に取り残される形になりましたが、延長約2 kmの石積みの堤防跡が続く干拓地らしい風景を見ることができます。



第二号干拓堤防

③丙川三連樋門・④桜の馬場樋門

江戸時代以降、大規模な干拓が進められてきた岡山平野南部地域には、干拓用排水樋門※や灌漑用水の分水樋門などが数多く築造され、今なおその姿を見ることができます。



丙川三連樋門
「近代化遺産ガイドブック より」

丙川は、干拓された岡山市興除・藤田地区を児島湾に向かって流れる河川です。丙川に設置された三連樋門は、煉瓦と石で造られ、3つのアーチ型の水の通り道が設けられており、干拓を請け負った藤田組の技師によって設計されました。

明治期に造られた樋門の中では、規模も大きく立派なもので、デザインもヨーロッパ風で、現在も使用されています。

なお、妹尾川にも三連樋門（妹尾川三連樋門）がありましたが、工事に伴い取り壊されました。

かつて妹尾川（国道30号興陽高校バス停脇）にあった桜の馬場樋門は、国道の拡幅工事に伴って撤去され、約3km南の藤田スポーツ広場に移設、保存されています。

隅石とアーチの環の部分に花崗岩が用いられているものの、煉瓦を主体として造られているのが特徴で、石と煉瓦のコントラストが目を引きま。煉瓦には讃岐煉瓦株式会社の刻印があるそうです。

（※樋門） 干拓地の排水と用水路からの取水を行う水門のこと



桜の馬場樋門
「近代化遺産ガイドブック より」

⑤片崎樋門・⑥常川樋門・⑦宮川樋門・⑧奉還樋門

いずれも岡山市灘崎町にある樋門で、この地域（児島湾開墾第一区）が明治33年ころ潮止め工事を終えていることから、このころに造られたものと考えられます。



片崎樋門

「近代化遺産ガイドブックより」



宮川樋門



常川樋門

「近代化遺産ガイドブックより」

奉還樋門も花崗岩と煉瓦で造られていて、二連の開口部を持ち、片方は排水、もう片方は船を通していたようです。排水する通路は現在も使用されています。これらはいずれも、干拓にかかわった藤田組の技師たちによって設計されました。



奉還樋門

「近代化遺産ガイドブックより」

⑨児島湾干拓資料室

児島湾干拓地の全景写真、干拓の工法をはじめ、干拓の歴史を伝える記録や資料が収集・展示されており、干拓について学ぶことができます。

時 間：9：00～17：00

休 日：土、日、祝日、年末年始

駐車場：あり



⑩岡山県立興陽高等学校

この地域で使用されていた農機具や農業機械が多数展示されています。また資料室には、藤田組やこの地域の家庭で保存されていた貴重な写真も多数所蔵されています。

時 間：8：25～16：55

休 日：土、日、祝日、年末年始

駐車場：あり

※閲覧する場合は事前連絡が必要です。



「岡山シティミュージアムHPより」

●江戸時代の土木技術者 津田永忠●

児島湾締切堤防で締切られたエリア外でも古くから干拓は行われており、備前岡山藩重臣の津田永忠らによって沖新田1,900haをはじめとする大規模干拓が行われ、江戸時代だけで約6,800haの新田が生み出されました。



津田永忠（1640-1707）

津田永忠は1640年（寛永17年）岡山に生まれました。倉田新田や沖新田の造成、倉安川や百間川※の開削等数々の一大土木事業を手がけました。

「児島湖 過去から未来へ 岡山海岸保全事業のあゆみ より」

※令和元年に「倉安川・百間川かんがい排水施設群」として、世界かんがい施設遺産に登録されました。



①倉田新田・沖新田概要図

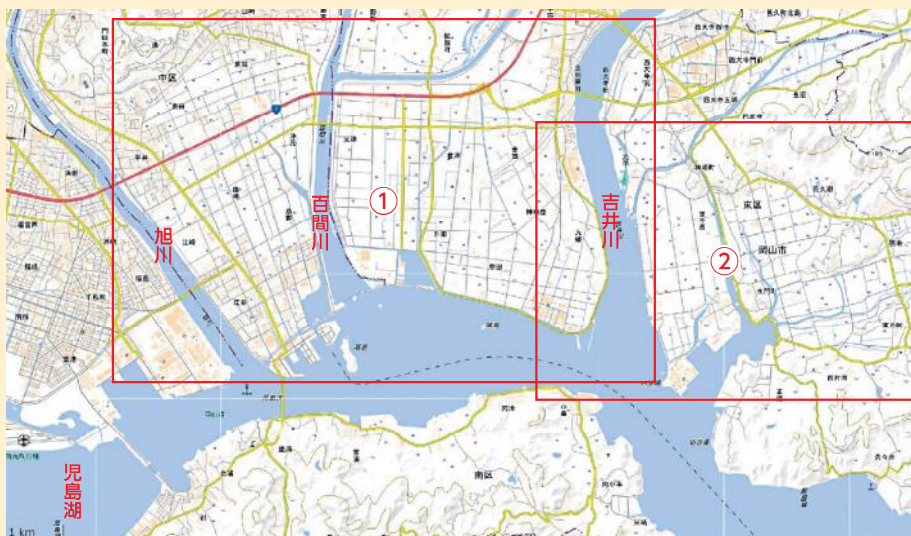
池田光政が津田永忠に命じた最初の藩営新田。この新田には倉田、倉富、倉益の3村が置かれました。この新田の用水として開削されたのが倉安用水です。



②幸島新田概要図

池田綱政の時代になると、吉井川の河口東部にあたる幸島新田に着手しました。新田の排水路末端に大きな遊水池を設け、樋門との組み合わせで排水する新技術が開発されました。

「児島湖読本～どっこい生きている児島湖～ より」



概要図の
現在の位置

※地理院地図を加工して作成

児島湾沿岸地区は、岡山県南部に位置し、児島湾の干拓によって造成された平坦な水田地帯で、岡山市、玉野市、倉敷市の3市にまたがる受益面積約4,320haの農業地域です。

当地区は、世界第2位の人造湖である児島湖を囲むように土地が広がり、東には旭川、中央に笹ヶ瀬川、南部に倉敷川が流れています。南東の児島半島には、瀬戸内海国立公園の一角をなす美しい景観が形成されています。



「児島湾沿岸地区 概要より」

コラム 世界第1位の面積の人造湖は？

児島湖の面積は、ダム湖を除く人造湖の中で世界第2位（約11km²）。世界第1位の人造湖は、1932年に完成したオランダにある「アイセル湖」。その面積はおよそ1200km²と児島湖の100倍以上になります。

そして、児島湖はそのアイセル湖をモデルにして造られました。

営農

干拓地には岡山市の農業の中心を成す穀倉地帯が形成されており、近年では、水稻を中心として二条大麦のほか、施設なす、玉ねぎ、レタス、れんこんといった多様な高収益作物の栽培が展開されています。

干拓によってつくられた 児島湖周辺の農地

「児島湾干拓と児島湾締切堤防より」



収穫間近の 二条大麦畑

「国営総合農地防災事業（大規模地震型）
児島湾沿岸地区計画概要 より」



朝日、アケボノ、ヒノヒカリなどのさまざまな品種のお米
「児島湾締切堤防の概要より」



干拓地に広がるレタス畑
「児島湾周辺農業水利事業 完工記念誌 より」



千両ナス

「児島湾周辺農業水利事業 完工記念誌 より」



「国営総合農地防災事業（大規模地震型）児島湾沿岸地区計画概要 より」

「備南の千両ナス」は、岡山ブランドとして京浜、京阪の市場に出荷し、京都方面では漬物用として重宝され、全国で高評価を受けています。

本地区は山陽地方を代表する大規模優良農業地帯として大きな役割を果たしています。

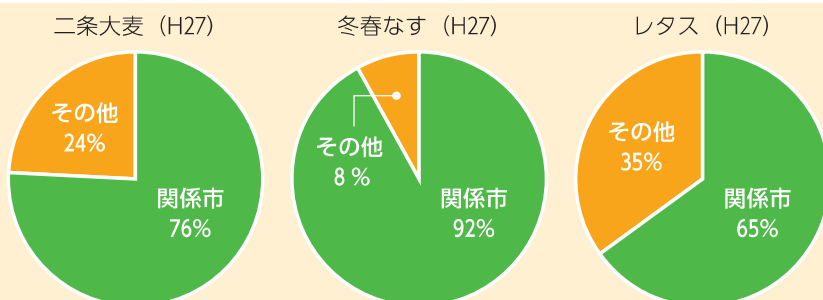


高品質のブランドとして定着した藤田レタス

「JA岡山HP より」

岡山県に占める関係市（岡山市・玉野市・倉敷市）の作付面積割合

出典：岡山農林水産統計年報



新たな農業への取組み

干拓地内では省力・高品質を実現するための取組みが進められています。



ドローンによる薬剤散布の様子



【ドローン導入による作業の効率化】

圃場での薬剤等の散布作業にドローンを導入し、二条大麦の赤カビ病防除を行っています。これにより、作業負担が軽減され、作業の効率化が図られています。

（有）国定農産圃場にて

全国に先駆けた先進的な営農の展開

大正9年に岡山県で農業用石油発動機の製造が始まって以降、大正末期から昭和初期にかけて、岡山県産の発動機が一気に増産されました。

石油発動機とバーチカルポンプ※1は、児島湾干拓地に不可欠であるとして、農業の機械化は一気に進展し、児島湾干拓地は岡山県内の農業機械利用の中心として興隆しました。



石油発動機

「岡山シティミュージアムHPより」



バーチカルポンプ※1



全国初のコンバイン現地研究会の開催
(興陽高校) 1964年

「児島湾干拓および農業発達史 より」



当時のコンバイン

「岡山シティミュージアムHPより」

(※1 バーチカルポンプ) 用水路などから田んぼに水をくみ上げるポンプ。「バーチカル」は垂直の意味で、水が垂直に上昇することを表します。

農業用機械製造業※²は岡山県を代表する地場産業となり、昭和11年から12年には全国生産の約60%を占め、アジア・アフリカ・中南米に輸出されるまでになりました。

現在では、石油発動機メーカーの大半は廃業しましたが、岡山県は今日でも農業用機械製造業（製品出荷額等）の全国シェア9.6%（平成30年）を占めています。干拓地農業とともに発展した農業機械製造は、現在でも最先端の独創的な製品を開発・生産し、他県をリードしています。

農業用機械製造業の県別順位（平成30年）

順位	事業所数			従業者数			製造品出荷額等		
		事業所	全国比(%)		人	全国比(%)		億円	全国比(%)
1	大 阪	75	11.5	茨 城	2,973	10.9	茨 城	2,664	27.9
2	北海道	68	10.4	大 阪	2,203	8.1	栃 木	939	9.8
3	岡 山	55	8.4	岡 山	2,115	7.8	岡 山	917	9.6
4	新 潟	37	5.7	愛 媛	1,834	6.7	大 阪	559	5.9
5	兵 庫	29	4.4	北海道	1,794	6.6	愛 媛	551	5.8
6	長 野	28	4.3	栃 木	1,535	5.6	北海道	475	5.0
6	愛 媛	28	4.3	広 島	1,290	4.7	長 野	419	4.4
7	茨 城	25	3.8	長 野	1,271	4.7	静 岡	263	2.8
7	栃 木	25	3.8	高 知	1,136	4.2	広 島	256	2.7
8	愛 知	23	3.5	新 潟	1,075	4.0	高 知	225	2.4
9	高 知	22	3.4						
10	静 岡	21	3.2						
	全 国	654	100.0	全 国	27,187	100.0	全 国	9,550	100.0

※経済産業省「工業統計調査・産業分類別統計表」（都道府県別表）に基づき作成

（※2 農業用機械製造業）主に耕うん、整地、栽培、収穫、その他農業用に使用される機械を製造する産業のこと。

生活

岡山平野南部地域は、広域交通の要所です。東西にJR山陽本線、山陽新幹線及び国道2号線が、南北にJR宇野みなと線、瀬戸大橋線及び国道30号線が走っているほか、児島湾締切堤防が岡山市街と玉野市を結んでいます。また宇野みなと線の終着駅（宇野駅）には宇野港が位置し、児島湖の北側には岡南飛行場もあります。

沿線を中心に住宅地が形成されており、飲食店や工場なども立ち並びます。近年では大型商業施設もでき、多くの人が集まるようになりました。また、浦安総合公園、灘崎町総合公園などの公園やスポーツ施設も整い、子育て環境の面でも充実しています。



岡山県緊急輸送道路※1に設定されている国道30号線



(※1 緊急輸送道路) 災害発生時に救助・救急・医療・消火活動及び避難者への救援物資の供給等に必要な人員及び物資等の緊急輸送を確保するために必要な道路。

観光・レクリエーション



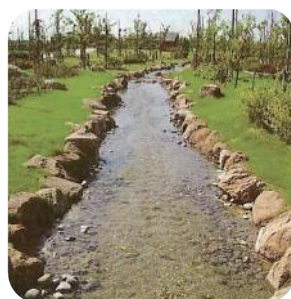
①岡山市サウスヴィレッジ



②灘崎町総合公園「岡山市公園協会HPより」



③道の駅 みやま公園「道の駅 みやま公園HPより」



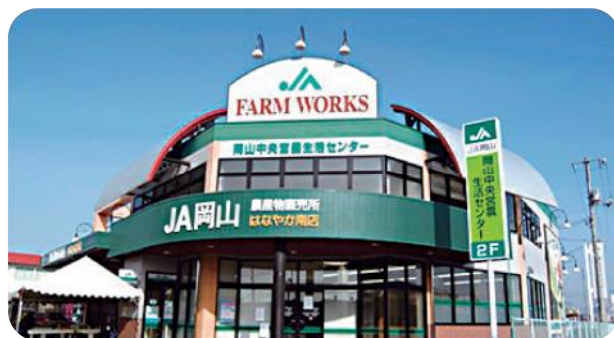
④自然環境体験公園
「岡山県下水公社HP より」



⑦浦安運動公園「岡山市公園協会HPより」



⑤岡山市中央卸売市場「岡山市HPより」



⑧はなやか南店「JA岡山HPより」



⑨沖田神社



⑥岡南飛行場「岡山県環境管理HP より」

干拓地の景観とビューポイント

干拓事業により形成された広大なスケールの干拓地とその中に張り巡らされた水路や国立公園に指定されている金甲山のほか、海域であったころの島々が孤立峰、あるいは低丘陵が優れた景観をなします。

その麓に形成された集落も含めて、歴史や自然と暮らしが相まった農・漁村風景が岡山平野南部地域に展開されています。

広大な農地と農地内を縦横に流れる用水路、樋門等の農業施設、農業集落では、そこで栽培される稲、麦、大豆等の農作物や用水路沿いの桜等が四季折々の彩を添え、豊かな景観を形成しています。



水路の風景



宮川樋門と干拓記念碑



金甲山
「岡山県環境文化部HP より」



昭和天皇 御製の碑



いちごの栽培



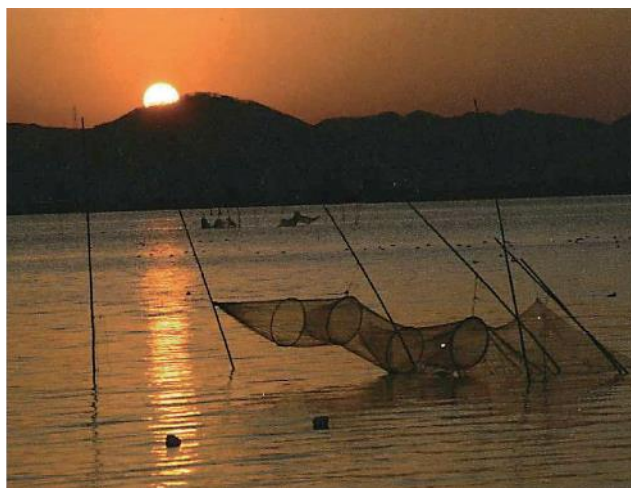
水稻

「児島湖周辺農業水利事業 完工記念誌 より」



麦秋

「児島湖 過去から未来へ 岡山海岸保全事業のあゆみ より」



夕日の児島湖

「児島湖読本 ～どっこい生きている児島湖～ より」

コラム ふなめしと児島湾干拓



ふなめしの歴史は、児島湾干拓の歴史と共にあります。江戸時代から本格的な新田開発が始まり、先人たちは大変な苦勞をして開墾を進めてきました。干拓地にはりめぐらされた農業用水路では沢山のフナが獲れ、中でも寒中に獲れる「寒鮒」は、特有のコクがあり珍重され、貴重なタンパク源となっていました。寒い冬の日、新鮮な寒鮒をまな板の上で調子よくトントンと包丁でたたいて料理したことから、「とんとこ汁」「とんとこ飯」とも呼ばれ、地元の人々に愛されてきました。「岡山の郷土料理 ふなめしより」

児島湖でみられる 生き物たち

岡山平野南部地域は、古くから干拓によって形成された水田が発達し、水田、水路、河川、児島湖とつながる水環境に恵まれており、ヨシ、フナ、マツカサガイなどが生息しています。



ヨシ

泥の中に地下茎を張り巡らし、春に芽吹いて大群落をつくり、高さは1～3mにもなります。

「児島湖ハンドブックより」



フナ類

湖や池、流れのゆるやかな河川などにすんでいます。特に泥底の場所を好み、よく低層近くを泳いでいます。雑食で、藻類や低生生物を食べます。

「児島湖ハンドブックより」



チュウヒ

トビよりも小さい中型のタカです。かすかな声で「キュッ、キュッ、キュッ」などの聞こえる声で鳴きます。

「児島湖グリーンガイドより」



ミサゴ

オスメスとともに同じ色柄のタカです。タカ類は飛んでいるのを下から見上げることが多いのですが、飛翔中のミサゴは下から見ると白く見えます。

「児島湖グリーンガイドより」



マツカサガイ

砂礫の河床に多く生息する二枚貝で卵型の分厚い殻をもちます。殻の表面にはその名の通り、細かな松かさ模様があります。環境省レッドリストにおける準絶滅危惧種に指定されています。

「児島湖ハンドブックより」

環境保全

環境保全活動については、環境保全任意団体「児島湖流域エコウェブ」が児島湖周辺における環境保全に関する調査実践活動に取り組むとともに、年2回環境保全に関する普及・啓発活動（講演会等）を行っています。

また、児島湖畔環境保全アダプト推進事業（岡山県単独事業）を活用し、19団体が児島湖畔の環境美化活動に取り組んでいます。

児島湖環境保全事業の取組状況



児島湖流域清掃大作戦
(締切堤防会場)



児島湖流域清掃大作戦
(篠ヶ瀬新橋会場)

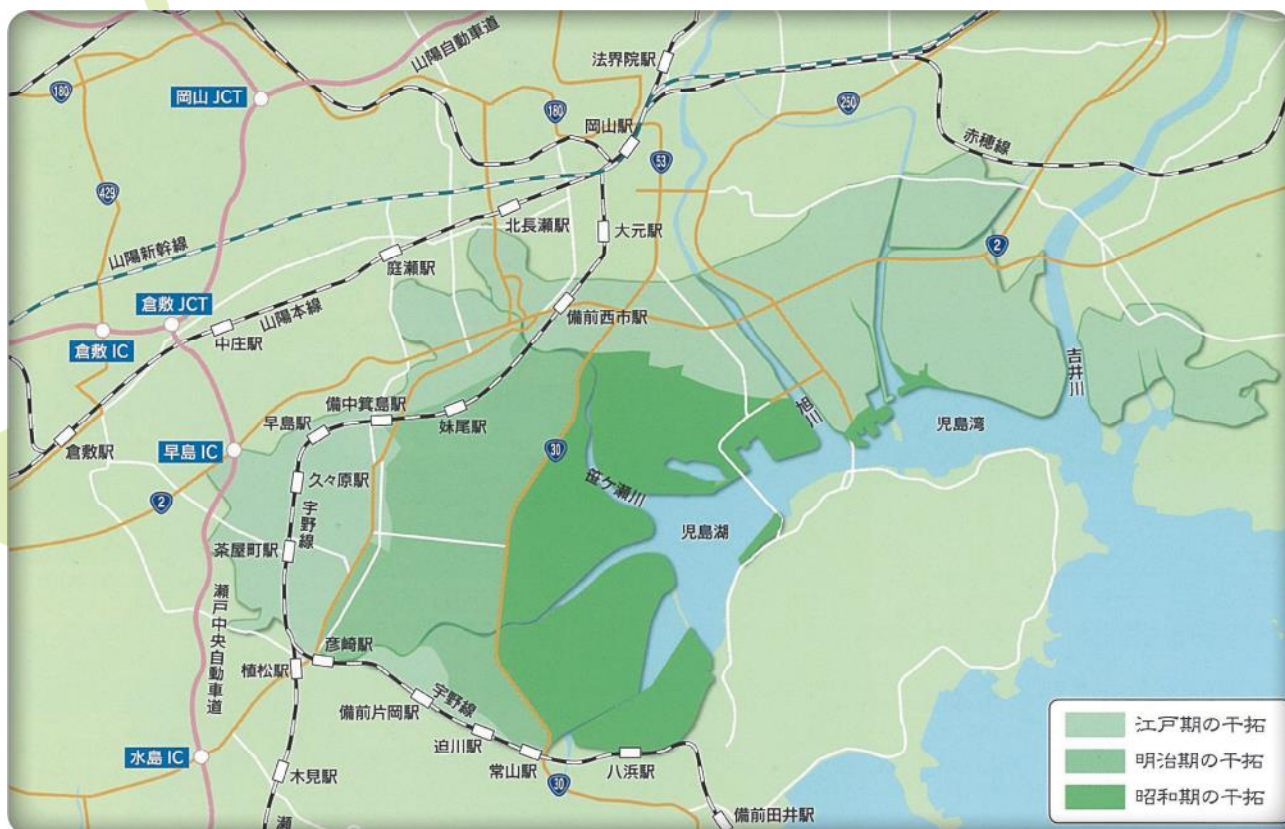
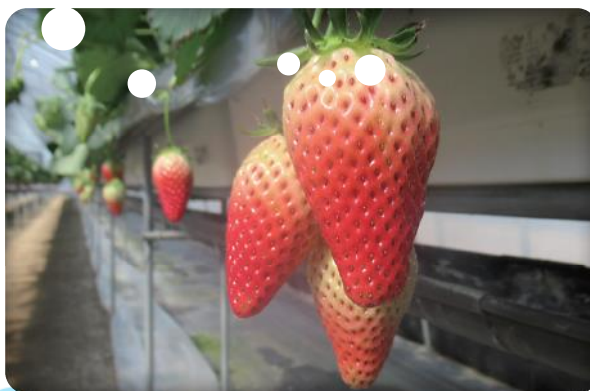


児島湖流域清掃大作戦
(参加者による魚の放流)



児島湖触れ合い環境フェア

「児島湖ハンドブックより」



〈江戸時代以降に干拓された範囲〉
「児島湾干拓と児島湾 締切堤防 より」

農林水産省 中国四国農政局 岡山南土地改良建設事業所

〒700-0973 岡山県岡山市北区下中野 1223-5

TEL 086-236-6240 FAX 086-236-6241

ホームページ <https://www.ma.go.jp/chushi/kj/okayamam/index.html>

(作成：令和2年7月)